

Title	別府温泉
Author(s)	石川, 成章
Citation	地球 (1924), 2(1): 223-227
Issue Date	1924-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/182695
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

殿址荒涼渭水東。
清后行宮碧蘚荒。

分明樹色接新豐。
會經宮監倚新妝。

開天遺事倩誰語。
只今田老司門鑰。

不遇津陽門北翁。
手導吾曹浴御湯。

別府溫泉

石川成章

溫泉通が口を開けば別府は九州の箱根だといふが、其所在の地理的關係からいへば、九州の箱根は寧ろ島原の雲仙溫泉か又は阿蘇か霧島の溫泉を以て之に當つべきであつて、別府は恰かも熱海に似た處である、併し熱海は境域小隘で

到底別府の景勝雄大に及ばない、阪神地方から下之關まで急行列車を利用すれば約十八時間で達する事が出来、汽船を利用すれば、行く行く瀬戸内海の勝景を賞觀しつゝ一晝夜で別府に行く事が出来る。

箱根、熱海觀光の外客や京濱を初め關東地方の客が多く、別府は阪神地方より四國、中國、

九州の客が多い、近年水陸の便を利用して滿、鮮地方よりの浴客が年々著しく増加するのみならず設備の改善に伴ふて外人の來浴者も追々増加する狀況である。

昨年の大震災前から我邦の商業經濟力の中心は、京濱地方から阪神地方に移りつゝあつたが震災後は、愈々阪神地方の經濟力が優越の地歩を占めた、従て別府溫泉の繁盛は箱根熱海を凌駕する事と爲つた。

貝原益軒翁の豐國紀行によれば、今より二百三十年前なる元祿七年、貝原翁の豊後に遊んだ頃は、別府の民家は僅に百軒計りであつた様子

であるが、明治四十二年には濱脇を合せて戸數三千五百餘に達し、今は正に約五千戸に増加して居る、實際發展の趨勢は大分市を凌駕する狀況であるから、市制を布かるゝのも決して遠い事では無い、今年既に九州の東海岸を縫ふて延岡、宮崎に至る鐵道は開通し、熊本市より阿蘇の北麓を經、九州中部を横斷して大分市に出づる鐵道の開通も今後數年の間に逼り、別府地方各溫泉巡りの電車も愈々布設の運に爲つて居るから、何れも別府の發展を促進する譯であつて、今や別府溫泉は決して九州の別府でなくして、實に日本の別府である、否東洋の別府であるかも知れ無い。

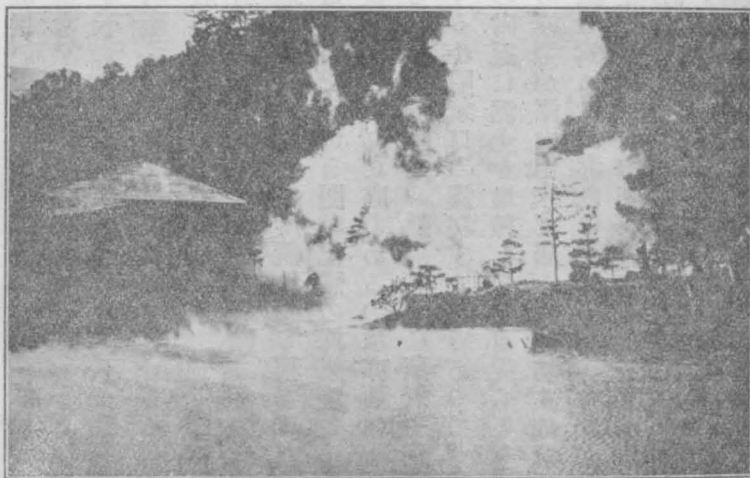
別府溫泉の特色は、溫泉の種類が多い事や、紺屋地獄や海地獄、坊主地獄、血の池地獄の様な氣拔な溫泉巡りの見物の他に、砂湯、蒸湯の如き特別なものがあり、木賃の制度、入湯の方法其他一切の空氣が開放的平民的、家族的で元來一面識も無い越人も異客も、渾然融和せる一家族の如く親睦して、何等の遠慮も心配も無く

樂しく調適の湯の中に浸る事の出来る點に在る。

實際別府では地の下を掘りさへすれば、何處からでも溫泉が湧き出るのであるから、湯元だの引湯だのといふ事は無く、市内數個處の共同湯の他、數十軒の旅館に悉く内湯があるのみならず、雨後の筍の様に近年建てられる別莊にも各個に内湯が供へられ、停車場や理髮所の洗面にまで溫泉が用ひらるゝ有様で、別府の町は全然湯の上に浮んで居るのかと思はるゝばかりである。

今別府及び其附近の主要なる溫泉名、所在地溫度、泉質を舉れば次の通りである。

泉名	所在地	泉質	溫度(攝氏)
不老泉	速見郡別府町別府	炭酸泉	四九度
靈潮泉	同	同	四八度
東溫泉(弦月池)同	濱脇	食鹽泉	六〇度
西溫泉(清華泉)同	同	炭酸泉	五六度
乾波泉(竹五湯)	別府町別府	炭酸性鹽類泉	五一・二度
楠湯	同	炭酸性單純泉	四九度
咄氣湯	同	同	五一・七度



別府海地獄

泉田の湯 石垣村南立石 硫黄性單純泉 三六・五度
 觀海寺湯 同 炭酸性單純泉 六一・七度
 上田の湯 同 單純性硫黄泉 四九・五度
 瀝の湯 朝日村鐵輪 鹽類性硫黄泉 四六・五度
 熱の湯 同 炭酸性單純泉 五三度
 明礬湯 同 鶴見 炭酸性硫黄泉 八七・五度
 四の湯 同 同郡御越町龜川 炭酸性鹽類泉 五八・〇度
 柴石湯 同 野田 含鐵炭酸泉 七四度
 金の湯 大分郡湯平村谷川 炭酸性鹽類泉 八九・五度
 銀の湯 同 同 五二度

炭酸泉は第三紀層から湧出するものが多く、慢性の胃腸病、子宮病又は神經系統の病に特效があり、硫黄泉は主に新火山岩から湧き出て、皮膚病に效能が著しく、鐵泉は創に效き、鹽類泉は消化器病、生殖器病、咽喉病に效果があると稱せらるゝ、兎に角浴遊の現實的效果の第一は、心機の一轉にある事勿論で、土地は高燥清秀で、前には天空開濶の碧海を受け、後に森々たる青山を負ひ、佳絶なる眺望と、新鮮なる大氣とは都門黄塵裡より脱出して來た人に、如何にも爽快融暢を實感せしむるは當然であつて、是が健

康増進、病氣減退に顯著なる效果あるを疑ふ餘地が無い、彼の岡鹿門翁の泉志に蓋別府不特以溫泉致繁盛、山海富景勝、東面瀛海、故夏不熱、北背峯巒。故冬不甚寒、能使下病者癒、痼疾、游者散、悵鬱、矣といへるは、能く這般の消息を盡して居る。

別府には又海地獄、坊主地獄、血池地獄、紺屋地獄、八幡地獄等所謂地獄と稱する處が數多在る、前記の如き開神悅體の極樂境に接近して地獄と名けられた處のあるのは亦面白き對照である。この地獄は、熱泉と共に蒸氣や瓦斯を噴出する小噴氣口の簇在する處であつて、其噴出口の附近に泥土を堆積して、可愛らしき小泥火山の模型が澤山出來て居る處が坊主地獄で、酸化鐵の爲めに濁赤色の熱湯を湛へた處が血の池地獄、藍黑色の物凄く熱池の在る處が紺屋地獄である、豊後風土記に玖倍理湯井と記載せるはこの地獄のことである、豊後風土記。玖倍理湯井在郡西。此湯井在郡西河直鐵輪山東岸。口徑丈餘。湯色黑。泥常不流。人解到井邊。

發聲大聲驚鳴沸騰二丈餘許。其氣熾熱。不可向睨。緣邊草木悉皆枯萎。因曰。惱湯井。俗語曰。玖倍理湯井。

海地獄には、昔戀に破れた可憐の美人が、燃ゆるが如き怨恨のやるせなさに熱池に投じた凄婉なる情話が遺つて居る、岡鹿門翁の泉志中にも是に關する記事がある。

鐵輪村在實相寺山北一里近。所在噴出熱泉。稱曰地獄。熱度猛烈。取干佛家焦熱地獄也。入村硫氣衝鼻。浴場三處。旁作石室。密閉蒸氣。就室乾浴。村背田隴。處々噴出熱泉。蒸氣騰上爲雲霧之狀。就而視之。呀然爲竅。時間沸騰殷響。一池泥淖灰色。沸熱噴起。爲沸渦狀。一池曰海地獄。湯水透明青色。熱度猛烈。投生物須臾糜爛。豐國紀行載。妬婦憤恚投身。全身沸爛。唯見髮浮湯面。二牛角闢。誤墜池中。瞬間糜爛。唯存骨角。或此池更往五六町。一池曰坊主地獄。池互三四間。沸熱騰上泥土二三丈。此風土記所謂。人至池側發大聲。則熱湯騰起丈許。其氣熾熱不可。

觸是也。地獄の近處に在る蒸湯と共に、別府温泉情緒の縣々たるものは海岸埠頭の砂湯である。

別府港埠頭の周圍の海岸砂地を一二尺掘れば下から温泉が湧き出て来るから半身を砂中に埋

めて、徐ろに蒸し温める事が出来る、即ち海水浴と温泉浴とが同時に出来る譯であつて、開瀾なる蒼空や碧海を眺めつゝ、悠然浴遊を肆にする原始的生活氣分は、一寸他では經驗の出来ぬ特殊の興趣である。

城 崎 温 泉

内 藤 湖 南

明治三十五年六月先生但馬に遊ぶ、沿泉紀行と題して、同年六月より朝日新聞紙上に現はれたるもの即是れ、今先生に乞ひて再録すといふ。

豊岡町に達せしは、(六月七日)午後七時頃なりき。豊岡は但馬第一の都會にして、柳行李の名産あり。出石よりの途上にて田畝の間に折々見たる、長四五尺に超えずして麻などの如く、茂生せる弱柳は、その原料として、栽培せらるゝと

ぞ、小場瀬氏に少憩すれば、この地の町長、原庄七君、こゝにて待ち合さる。原君はその藏幅を示さるべき豫定なりしも偶家に佛事ありて果さずとて、こゝに待合されしなりと。小場瀬氏も好事の人にて、その所藏なる、山陽、星巖、米山人などの書畫を示されたり、城崎よりは天野泰藏君、今朝より出迎へ居れりとて待合されれば八時半頃同じく發す、豊岡は但馬の腹地なる小さき平原の中央にありて、これより圓山川